

佐賀県研究成果情報（平成 25 年 3 月作成）

キウイフルーツすす斑病に対するベノミル水和剤の効果的な使用法					
〔要約〕キウイフルーツすす斑病に対して、 <u>ベノミル水和剤</u> を6月～7月に <u>2週間あるいは3週間間隔</u> で散布をすると防除効果が高い					
果樹試験場・病虫害研究担当			連絡先	0952-73-2275 kajushiken@pref.saga.lg.jp	
部会名	果樹	専門	果樹病虫害	対象	キウイフルーツ

〔背景・ねらい〕

キウイフルーツでは、近年すす斑病が多発生し、症状が激しいと早期落葉することによる樹勢低下や、果実では果実表面がくぼんだり、内部が褐変したりすることによる商品果率の低下が問題となっている。すす斑病に対して、ベノミル水和剤を6月上旬から散布すると防除効果が高いことは判明しているが、散布間隔についての知見は少ない。

ここでは、ベノミル水和剤を異なる散布間隔で散布し、すす斑病に対する防除効果を明らかにする。

〔成果の内容・特徴〕

- 1 ベノミル水和剤（商品名：ベンレート水和剤）2,000倍を6月～7月に2週間あるいは3週間間隔で散布すると、すす斑病の葉および果実での発生を抑制することができる（表1）。
- 2 ベノミル水和剤（商品名：ベンレート水和剤）2,000倍の4週間間隔の散布では、圃場における葉および果実でのすす斑病の発生は2週間あるいは3週間間隔散布とほぼ同程度に抑制される。しかし、貯蔵果実では発病（陥没症状や軟化症状）が増加し、2週間あるいは3週間間隔での散布と比較して十分な効果が得られない（表1、表2）。

〔成果の活用面・留意点〕

- 1 葉にすす斑病の病斑が確認される前の6月上旬から散布を開始することが重要である。
- 2 天候等の状況に合わせてながら、2週間～3週間間隔で散布を行う。散布間隔は3週間以上にならないようにする。
- 3 軟弱に伸長した枝では、葉でのすす斑病の発生が多くなるため、不必要な枝を伸ばさないような栽培管理に努める。
- 4 枝先まで薬剤がかかるように丁寧に散布する。

表1 キウイフルーツすす斑病に対するベノミル水和剤の防除効果(圃場試験)(2012)

区	薬剤散布日					反復	調査葉数(枚)	発病葉率(%) (9月5日)	調査果数(個)	発病果率(%) (10月30日)	葉害
	6/6	6/20	6/26	7/5	7/19						
1 ベノミル水和剤 2週間間隔散布区	○	○	-	○	○	①	100	4.0	100	2.0	-
						②	100	3.0	100	1.0	
	平均						100	3.5	100	1.5	
2 ベノミル水和剤 3週間間隔散布区	○	-	○	-	○	①	100	3.0	100	3.0	-
						②	100	2.0	100	3.0	
	平均						100	2.5	100	3.0	
3 ベノミル水和剤 4週間間隔散布区	○	-	-	○	-	①	100	10.0	100	3.0	-
						②	100	8.0	100	5.0	
	平均						100	9.0	100	4.0	
4 無散布区	-	-	-	-	-	①	100	17.0	100	13.0	
						②	100	10.0	100	15.0	
	平均						100	13.5	100	14.0	

1)ベノミル水和剤2,000倍の散布間隔を変えて試験を行った。

表2 キウイフルーツすす斑病に対するベノミル水和剤の防除効果(貯蔵試験)(2012)

区	反復	供試果数(個)	発病果数(個)	発病果率(%)
1 ベノミル水和剤 2週間間隔散布区	①	28	3	6.9
	②	30	1	
	平均		2.0	
2 ベノミル水和剤 3週間間隔散布区	①	30	1	1.7
	②	29	0	
	平均		0.5	
3 ベノミル水和剤 4週間間隔散布区	①	29	7	17.9
	②	27	3	
	平均		5.0	
4 無散布区	①	26	11	43.1
	②	25	11	
	平均		11.0	



写真 すず斑病の葉での発生状況

1)ベノミル水和剤2,000倍の散布間隔を変えて試験を行った。

2)収穫日:10月30日、11月26日(貯蔵26日後)に発病調査を行った。

3)貯蔵開始時に病徴の確認されなかった果実を供試した。

[その他]

研究課題名:果樹における難防除および新奇病害虫の迅速な防除技術の確立

予算区分:県単

研究期間:2012年

研究担当者:白石祥子、野口真弓、口本文孝

発表論文等:平成24年度 佐賀県果樹試験場業務年報